リサイクル技術を世界へ ～大崎モデルが地球を救う～

平成22年2月に本町とインドネシア国デポック市は、環境問題支援に関する国際協力関係を確認しました。

鹿児島大学と産学官連携に取り組む中で、同大学とインドネシア国インドネシア大学が国際交流協定を締結したことが交流のはじまりです。

インドネシア大学が所在するデポック市は、人口約170万人、面積約200平方キロメートルの都市です。本町の2倍ほどの面積に対し、人口は10倍以上。人口が年10％増加していることからごみ問題が深刻化しています。ごみの分別はほとんどされておらず、収集したごみは、混合した状態で排出され、そのまま郊外の埋立処分場に搬入されます。埋立処分場は許容範囲をすでにこえており、堆積したごみで大きな山のようになっています。

そこでデポック市は、本町のリサイクル技術を活用して、資源活用の意識付けと廃棄物の減量化に取り組むことを決めました。

今年本町は、インドネシア国デポック市の廃棄物処理技術を支援するJICA『草の根技術協力事業』を開始します。本事業では、大崎モデルの初期段階の分別を広めるため、3年間技術開発支援を行います。

7月初旬には、デポック市職員や地域のリーダーなどが本町を訪れ、埋立処分場やリサイクルセンターなどで研修を行います。

本町からは、8月に同市を訪問する予定で、現地において、埋立処分場の延命化及び衛生面の改善を図ることを目的に廃棄物の分別意識を高める普及活動を行います。合わせてモデル地区を設定し、このモデル地区を拠点に学校の環境教育など人材育成もスタートさせます。

今後、本町のリサイクルシステムが全世界に広まり、地球規模で環境問題を考える機会になり、次世代の子どもたちに豊かな自然を残すため、連帯した環境活動が高まることに期待が込められます。

▲分別意識を高めるため、アルミ缶を利用して作ったラボステーション

▼インドネシア国デポック市のごみ埋立処分場